



娘への思いが込められているIABPカテーテルを手にする筒井さん

## 加エッショナル 登場

### 東海メディカルプロダクツ

# 「娘助けたい」…医療器具開発

心筋梗塞の応急措置に使われ、弱った心臓の動きを助けるIABP（大動脈内バルーンポンピング）カテーテル。その国産化にいち早く取り組んだのが東海メディカルプロダクツ（愛知県春日井市）。きっかけは若くして逝った次女の存在だった。昭和43年に生まれた次女の佳美さんに先天性の重い心臓疾患があることがわかった。当時、医療について素人だった筒井さん夫妻は、心臓病に関する研究論文を片っ端から手に入れ、専門医に何度も足を運んだ。

## 筒井宣政さん(68)

が、結局、有効な治療法が見つからなかった。

佳美さんが9歳のとき、医師から「手術は不可能」と言われた。手術費用としてためていた2千万円超を寄付しようとした妻が医師に相談したところ、医師から人工心臓の開発を勧められた。

当時、家業の高分子化学メーカーを経営していた筒井さんにとって医療分野は未知の世界だが、「娘を何とか助けたい」との一心で人工心臓の開発を志す。筒井さんは手術費用にためた資金をもとに、東海メディカルプロダクツを設立。国などの

助成も受けながら8億円の開発費を投じて、人工心臓の試作品を完成させ、動物実験にまでこぎつけた。

しかし実用化には臨床試験が必要で、さらに巨額な資金がかかるかわかり、「個人の力では無理」と断念した。

昭和61年、筒井さんはIABPカテーテルの医療事故が国内で頻発していることを知った。当時は国産品がないため、日本人の体格に合わず、合併症などを引き起こしていたという。

家業の高分子化学メーカーとして従来から持つ、樹脂を押し出してチューブを成型する技術、さらに人工心臓の研究開発で培った医療用チューブの技術を生かして、IABPカテーテルの開発に取り組む。約2年かけて、日本人の体格に合わせた3つのサイズのIABPカテーテルを作った。平成元年12月の発売以降、東海メディカルプロダクツ製のIABPカテーテルは累計で7万人に使われたという。

より安全な製品を目指そうと、生産したIABPカテーテルは出荷前に半日余りかけて耐久試験を行う。初期不良を見つければ目的だが、品質が命に直結するだけに、すべてにおいて最善を期している。

佳美さんは平成3年に他界したが、「娘を助けたい」との思いは、「一人でも多くの人の命を助けたい」という思いとなって受け継がれている。

(松村信仁)

CAFE ECONOMY  
カフエ・エコノミー

ついでにのびまさ 関西学院大学経済学部卒。昭和39年、東海高分子化学。専務を経て、57年社長。56年に東海メディカルプロダクツを設立し、社長。名古屋出身。